

<サイド> 米朝接触に神経とがらす 政府、拉致置き去り懸念

1 / 1

2018/02/27 2:00

政府が北朝鮮との対話条件を事実上緩和した背景には、核・ミサイル問題を理由に対話に応じない姿勢を維持すると、米国が話し合い路線にかじを切った場合に立ち往生しかねないとの懸念がある。「米朝交渉が動きだしたら、日本は蚊帳の外に置かれる。拉致が置き去りにされかねない」（日朝関係筋）とみて、米国と北朝鮮の動きに神経をとがらせている。

条件緩和を印象付けるのは、安倍晋三首相の姿勢だ。韓国・平昌で冬季五輪開会式が行われた9日、当地で北朝鮮の金永南・最高人民会議常任委員長と言葉を交わし「日朝ハイレベル接触」を実現。その際、首相は拉致問題解決を求める日本の考えを北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長に伝えるよう求めた。「核放棄への具体的行動」がなければ対話に応じないとする従来方針に照らせば、一歩踏み出した対応だ。

その首相は訪韓中、同じく韓国入りしたペンス米副大統領の動きを注視していたとされる。政府筋によると、首相は米側からペンス氏が正恩氏の妹、金与正氏と会談するとの説明を受けていた。首相が情勢の変化を意識し、金永南氏と接触したのは想像に難くない。

米朝会談は実現しなかったが、対話ムードの広がりが圧力強化を掲げる日本に「逆風」（在京外交筋）となっている実情は否めない。ペンス氏の姿勢に関し、韓国は「対話する意思を明らかにした」（文在寅大統領）と評価。中国も「朝鮮半島情勢に表れた前向きな勢いを歓迎する」（同国外務省）と好意的だ。

日本側は今後も「対話のための対話は意味がない」（首相）として、核開発を続ける北朝鮮との本格交渉を控えるよう関係国に呼び掛ける構えだが、成果は見通せない。

[共同通信]